

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370223

研究課題名(和文)万葉集仙覚校訂本作成過程の解明に関わる万葉集諸伝本の包括的研究

研究課題名(英文)The Editing Process of Sengaku Version of Manyoshu Through Existing Handwritten Copies

研究代表者

田中 大士(Tanaka, Hiroshi)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：40722137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：万葉集の伝本は、仙覚が行った校訂本とそれ以外の非仙覚本系統に分かれるが、従来の研究では、両者の関係は全く明らかにされておらず、仙覚校訂本がどのように生まれたかが明らかでなかった。非仙覚本系統のうち、片仮名訓本系統の本が仙覚校訂本の底本であることを明らかにした申請者は、それを足がかりにして、現存する諸本の分析を行い、具体的に片仮名訓本を底本として校訂本が作られてゆく過程を明らかにし、その過程が現存の伝本に見いだせることを提示した。

また、上記の推測は、仙覚校訂本の奥書とは齟齬するが、奥書自体に矛盾があり、仙覚の記述に虚偽が存することを明らかにした。

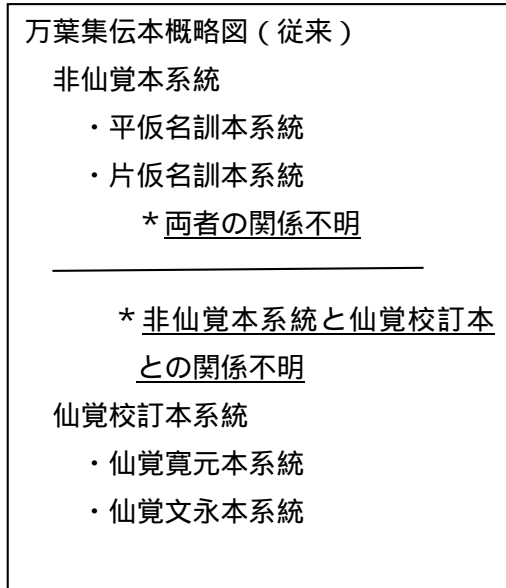
研究成果の概要(英文)：The study examines how the oldest anthology in Japan, Manyoshu, has been handed down for more than 1000 years. The existing Manyoshu handwritten copies are categorized into two groups according to their annotations: the books originally revised by Sengaku in Kamakura era (hereafter, Sengaku version) and the others (non-Sengaku version). Previous studies have not paid sufficient attentions to the relationships between them; Almost all researchers considered that Sengaku added annotations to Manyoshu handwritten copies all by himself, separately from non-Sengaku version. Thus, it is not known exactly how Sengaku version of handwritten manuscripts were edited and written. The present research focused on the relationships between Sengaku and non-Sengaku versions, and also editing process of the Sengaku version. The findings show that non-Sengaku version of books could be divided into some subclasses.

研究分野：日本文学

キーワード：万葉集伝本 仙覚校訂本 仙覚寛元本

1. 研究開始当初の背景

万葉集の伝本研究は、大正年間刊行の『校本万葉集』以来伝本間の枠組みはほぼ不明のまま推移していた。すなわち、万葉集の伝本は、仙覚が校訂を行った仙覚校訂本とそれ以外の本を意味する非仙覚本系統とに分けられるが、その両者の関係については言及されていない。それを概略すると下図のようになる。



その現状に関して、申請者は、非仙覚本系統のうち、片仮名訓本系統の本が同一系統であること、さらにその系統の本が仙覚校訂本の底本であることなどを明らかにした。この推論は、仙覚校訂本が、片仮名訓本を底本として作成されたことを意味し、仙覚校訂本は、それ以前に存在したよく似た伝本の形態に沿って成立したという従来の仙覚校訂本に見方とは真っ向から対立する結論を導くものであった。が、それ以上の究明を行うためには、現在は失われてしまった寛元本の姿を復元する必要があるが、それには、二十巻という浩瀚な諸伝本をいくつも分析しなければならないなど多くの課題が残っているという状況であった。また、上記の推論は、仙覚校訂本の奥書の記述とも齟齬する面があり、本研究の成果が定説として定着するためには、仙覚本奥書の究明も重要であった。

2. 研究の目的

万葉集の伝本は、仙覚校訂本の一つである西本願寺本が代表伝本として認識されている。この本の信頼性は高く、現在のすべての万葉集のテキストの底本として用いられている。しかし、その西本願寺本、ないし、それが属する仙覚校訂本がいかに生まれ、どのような過程を経て成立したかについてはほとんど

明らかにされていなかった。つまり、完成度の高い仙覚校訂本の信頼性に盲目的に頼ってきたとって過言ではない。万葉集の伝本は、長年、仙覚校訂本と非仙覚本系統のいずれのグループについてもその関係が明らかにされてこなかった。また、非仙覚本系統と仙覚校訂本との関係についても明らかにされてこなかった。両者の関係が明らかにされないことが、仙覚校訂本がどのように生まれてきたかが不明になっている大きな原因になっていた。仙覚校訂本が、いかなる本を底本にして生まれ、どのように変容していったかを、現存の諸伝本を徹底的に調査することによって大幅に書き改めることを目的とする。また、従来仙覚校訂本の実態解明を難解にしていた仙覚本奥書の記述を解明することにより、仙覚校訂本の歴史的位置を見直す。

3. 研究の方法

万葉集仙覚校訂本(寛元本)は、同じ片仮名傍訓の片仮名訓本系統の本を底本としており、そこに自らの訓を書き入れる事のできあがっていった。その過程は、紀州本、神宮文庫本、京大本代赭書き入れなどを詳細に分析することで明らかになる。たとえば、紀州本には、歌本文の右に底本の訓が、左に仙覚の訂正した訓が付されるという寛元本の本来の姿が見られるし、京大本代赭書き入れは、今は失われた寛元本の底本の訓が反映したことがわかっている。それら諸本の姿を分析することによって寛元本の姿を復元できる。また、それらの知見を十分活用することによって、仙覚校訂本の奥書の記述も読み直しが可能である。現存伝本のあり方と奥書の分析とを総合的に行うことにより、仙覚校訂本の生成過程が明らかにできると考えられる。

4. 研究成果

【伝本調査】まず、伝本の調査については、紀州本の調査を行った。この本は、長年実地調査が行われていなかったが、新たに調査を行い、科研経費によってカラー写真の撮影も行った。従来複製本が存したが、モノクロであった。この本は、朱によって仙覚校訂本の訓が付されており、その付訓位置や付訓のされ方に意味があるので、カラー写真が研究上

必須であった。また、紀州本は、綴じがきつく、通常の撮影では鮮明な画像が得られないため、元興寺文化財研究所に依頼して、いったん綴じを外しての撮影を行い、併せて装丁の調査、修復も行った。さらには、柘枝切の調査も行った。当該切は、紀州本と同じく、片仮名訓本に仙覚校訂本の訓が付された本であるが、残存する枚数が少なく、本全体の様相がわかりにくかったが、新出の国文学研究資料館蔵は、従来知られなかった朱の注記が存し、紀州本ときわめて近い本であることが明らかになった。また、当該切は汚れが甚だしかったが、画像処理によって朱の注記を復元した(雑誌論文)。

【研究1 春日本】まず、春日本万葉集を裏に持つ春日懐紙の中でも、かつて佐佐木信綱が調査を行った懐紙群について、懐紙面、万葉集面双方に渡る詳細な調査の成果を上梓した(図書)。ことに懐紙面を反転させて紙背の万葉集面を読み取る画像については様々な画像処理を行い、従来にはない鮮明な画像を得た。また、和歌懐紙から万葉集書写、再び和歌懐紙に戻されるまでの過程を詳細に解説し、春日懐紙が現在の形になるまでの過程を明らかにした。さらには、春日懐紙の中でも同題の懐紙を取り上げ、その裏の万葉集(春日本)の様相について詳しく解説を行った(雑誌論文、学会発表)。また、春日本の書写、古葉略類聚鈔の作成を行った中臣祐定の万葉集の書写態度について検討し、底本に忠実である春日本、積極的に校訂を行う古葉略類聚鈔双方の万葉集伝本としての性格を明らかにし、さらには、双方を書き分けた祐定の知見についても明らかにした(雑誌論文、学会発表)。

【研究2 紀州本】上記〔伝本研究〕で行った紀州本の調査成果と、京大本代赭書き入れの分析の成果を基に、仙覚は、片仮名訓本の一本を底本として用いて、そこに自ら考案した訓を書き入れることによって校訂本が生まれるという寛元本生成の道筋が明らかになった(主として雑誌論文 と、学会発表)。そして、紀州本の現在の姿に寛元本の面影が見いだされる点、京大本代赭書き入れが寛元本の底本の訓が反映しているという点ご確認された。一方、それらの成果による推論は、仙覚校訂本の奥書の記述とは鋭く対立していた。しかし、仙覚校訂本の奥書について詳細な分析を行ったところ、仙覚の奥書には、それ以前の伝本(光行本や親行本など)にあったはずの記述が意図的に落とされていることが判明し、さらに奥書自体にも矛盾が見られ、仙覚が底本が片仮名訓本であることを隠匿しようとしていたことも明らかになった(主として雑誌論文、学会発表)。仙覚校訂本の底本が平仮名訓本であるという従来の定説は、この奥書の記述が唯一絶対の証拠であったので、それが解決したことに

よって、仙覚校訂本の生成の過程への推論がほぼ確定したとよい。

この推論によって、仙覚校訂本が、孤高の存在ではなく、それ以前に存した親行本のさまざまな試みを受け継ぎながら形作られたという、万葉集伝来史において画期的な知見につながる。さらに、親行本に焦点が当たることによって、源氏物語などの他の古典作品の校訂とのつながりも明らかになり、鎌倉時代の古典作品の研究全体への展望をも持てるようになる。

【研究3 広瀬本】片仮名訓本系統で、紀州本が仙覚校訂本寄りの性格であるのに対して、広瀬本は、片仮名訓本系統の原初の姿を持つことを明らかにした。広瀬本は、巻二長歌訓の内容から、それ以前の忠兼本の訓を踏襲していることを明らかにし(雑誌論文)。また、広瀬本が、巻二十の最後の九十首あまりを欠く本(「九十余首なき本」)の系統であることから、やはり忠兼本の系統であることを明らかにした(学会発表)。さらには、平仮名別提訓である忠兼本が、京都の雲居寺にある間に書写された際、片仮名訓に移し替えられたのが、広瀬本の姿を反映している旨を推定した(雑誌論文)。

以上の研究を踏まえると、万葉集の諸伝本の関係は次のようになる。

万葉集伝本概略図(成果)

非仙覚本系統

- ・平仮名訓本系統
- ・片仮名訓本系統

底本として校訂

- ・仙覚寛元本系統
- ・仙覚文永本系統

仙覚校訂本系統

【社会貢献】上代文学会の夏季セミナー「万葉写本学入門」で、若手研究者や大学院生、一般の万葉集愛好者のために、万葉集の伝本について平易な解説を行った(雑誌論文・学会発表)。申請者は、非仙覚本系統から仙覚校訂本への移行について解説を行った。一般には、万葉集の伝本についての理解は難解と考えられてきたが、画像や表を駆使しながら、わかりやすく解説を行った。

また、美夫君志会の万葉ウォークでは、昭和美術館の紀州本万葉集について、解説を行った(学会発表)。二十巻揃いの本であるが、巻十までとそれ以降とで系統が異なるこ

と、朱で仙覚校訂本の訓が付されていることなど、パワーポイントを使いながら解説した。この行事は、学会の催しではあるが、一般人向けの行事で、本研究で明らかになった紀州本の内容を、新たに撮影したカラー写真を用いて、平易に解説を行った。

また、万葉文化館の講演では、地元奈良の春日社（若宮社）の神主であった中臣祐定の業績について、主として春日懐紙における和歌詠出と、春日本書写について平易に解説を行った（学会発表）。

いずれも、本研究の研究成果を若手研究者や一般人に向けてわかりやすく解説したものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

田中大土「万葉集伝来史上の広瀬本万葉集の位置」『国文目白』第56号 p14-22 2017年2月 査読なし

田中大土「万葉集仙覚校訂本のはじまり」『万葉写本学入門』 p27-36 2016年5月 査読なし

田中大土「春日本万葉集と古葉略類聚鈔」『高岡市万葉歴史館叢書』第28号 p47-66 2016年3月 査読なし

田中大土「万葉集仙覚校訂本における親行本の扱い」『美夫君志』第92号 p1-12 2016年3月 査読あり

田中大土「柘枝切の新出資料 国文学研究資料館蔵切」『早稲田大学日本古典学研究所年報』第9号 p1-6 2016年3月 査読あり

田中大土「万葉集忠兼本の系譜」『国語国文』第84巻11号 p1-18 2015年11月 査読あり

田中大土「万葉集仙覚寛元本の底本」『上代文学』第113号 p41-54 2014年11月 査読あり

田中大土「春日懐紙「遠山雪」題の新出資料」『文化史史料考証』p411-419 2014年11月 査読なし

〔学会発表〕（計6件）

田中大土「万葉集伝来史上の九十余首なき本」〔日本女子大学学術交流企画シンポ

ジウム「万葉集「九十余首なき本」の話）2016年12月10日（於日本女子大学目白キャンパス・東京都・文京区）

田中大土「万葉集平仮名傍訓本」〔万葉文化館共同研究 研究発表会）2016年8月27日（於 奈良県立万葉文化館・奈良県・明日香村）

田中大土「春日若宮社神主中臣祐定と万葉集」〔万葉文化館特別展「万葉と春日」記念講演）2015年10月4日（於 奈良県立万葉文化館・奈良県・明日香村）

田中大土「紀州本万葉集解説」〔美夫君志会万葉ウォーク）2015年9月13日（於昭和美術館・愛知県・名古屋市）

田中大土「非仙覚本系統から仙覚校訂本へ」〔上代文学会夏季セミナー「万葉写本学入門」）2015年8月21日（於青山学院大学 青山キャンパス・東京都・渋谷区）

田中大土「春日本万葉集と古葉略類聚鈔」〔2015年高岡万葉セミナー）2015年8月2日（於高岡市万葉歴史館・富山県・高岡市）

田中大土「紀州本万葉集巻十の奥書」〔美夫君志会全国大会招待研究発表会）2015年6月27日（於中京大学・愛知県・名古屋市）

田中大土「万葉集京大本代赭書き入れによる仙覚寛元本復元の試み」〔上代文学会大会）2014年5月18日（於山梨英和大学・山梨県・甲府市）

〔図書〕（計1件）

田中大土『春日懐紙（大中臣親泰・中臣祐基）』2014年10月 121頁 汲古書院

〔その他〕
ホームページ等

特になし。

6 . 研究組織
(1)研究代表者

田中 大士 (TANAKA, Hiroshi)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：4 0 7 2 2 1 3 7